

## にちよう 学芸館

### 本番前の合言葉 円陣組み気持ち鼓舞

「Show must go on (ショウ・マスト・ゴー・オン)」。演劇部では、開演前に必ずこの合言葉を唱え、気持ちを高めていく。舞台で何が起きてても最後まで続けるという覚悟を表したもので、演劇の世界でよく知られた言葉だ。

部員の1人を先導役に、全員で円陣を組み、声をかけ合うのがいつものスタイル。他の部員はファイティングポーズを取り、合言葉と一緒に拳を突き上げる。いつごろから始まったかはっきりしないが、少なくとも数年前から今のスタイルになったといい、開演前のルーティンとして定着している。

友人や地域の人たちを日々に招いての開催となった3月19日の自主公演では、顧問の平田恵子教諭と、同月末まで共に顧問を務めた齊藤金哉さんも円陣に加わった。この日の先導役は部長の鈴木結女さん。「ついに来ちゃいましたね。目いっぱいやりましょう」と切り出し、最後に全員で「ショウ・マスト・ゴー・オン」と声を張り上げ、本番に向けてスイッチを入れた。

副部長の斎藤水涼さんは「舞台に上がってしまえば、個性を出さないと周りに埋もれてしまう。お客さんに『恥ずかしがっている』と思われないよう、緊張した気持ちを舞台へのエネルギーに変えます」と話す。



▶創部年=1960年。文芸部から独立。  
▶部員数=7人（3年7人）  
▶近年の主要な実績=県高校演劇発表会最優秀賞（2021、22年）。第54回（21年12月）、第55回（23年1月）東北地区高校演劇発表会優良賞



自主公演で上演した「crane（クレイン）は風を慕う。」。秋田なまりのせりふも入れるなどして脚色した=3月19日、羽後町文化交流施設・美里館

鈴木結女さん（3年）  
演じる私たちの心と舞台上見るお客様の心がぶつかる。演じる側と観客が一緒に作っていこうのが演劇の一番の魅力だと思います。生のライブ感覚をぜひ楽しんでください。

### 観客と心ぶつかり合う



しまましたが、上演後はやり切ったという達成感を多く感じました。うれしい場面でも、私たちは云えたりが見ている人たちに伝わるよう、まずは自分たちが舞台を楽しもうと思っています。一緒に楽しみましょう。



本番前に台本と照らし合わせながら照明や音響の手順を確認する男子部員

昌也（3年）  
演劇部に入部したきっかけは、入部のきっかけは、中学生年の時の体験入学でした。新型コロナウイルスの感染拡大のため、映像による紹介だったので、舞台を作りたいとの存在を知つて、実際に見て初めての自主公演。コロナ禍による中止を経て実現した舞台は緊張

新型コロナウイルス禍で2020年以降中止が続いている湯沢高校演劇部の自走公演が先月19日、羽後町文化交流施設・美里館で開かれた。新たな演技のチャレンジと技術向上を図るとして、1年間の活動を締めくくる開幕式だった。3年ぶりの

Come On!  
13 文化部

### 湯沢高演劇部



開催= 生徒やOB、地域住民約100人が集まつた。  
最初の公演「crane（クレイン）は風を慕う。」

「は風を慕う。」（大沢ケイ一作）は、演劇部で脚本を脚色し、8ヶ月にわたり稽古してきた作品。入院したクラスメートに届ける手錦を巡って、うなぎ話からスケールカースト（教室内の序列）が浮かび上がる。ストーリーは湯沢高校ならぬ「湯川高校」の教室を舞台、生徒役の鈴木結女さん（石炭伐採者）、斎藤水涼さん（人々がそれを喜ぶ場）が、替え、折り鶴を持つながら互いの腹の内を探り始める。会話する時の立ち位置や、机の上の折り鶴を意に落とすといった一連の動きは細かく、自然体だ。メガホンで叫ぶときは細かく、自然体だ。部長の鈴木さんは、せりふの真に込めた意味や感じを取り、全体でどう表現するかを考えているので、台本やト書きをつり書き

斎藤さんは無頭を披露した。

照明や音響機器の操作は、科学部

とかけ持ち（門田樹さん、森田穂さ

花さん）主役を務めた。劇後は、羽

後町の大演劇一座劇団などが

で芸能・異業団としても活動する

斎藤さんは無頭を披露した。

照明や音響機器の操作は、科学部

とかけ持ち（門田樹さん、森田穂さ

花さん）主役を務めた。劇後は、羽

後町の大演劇一座劇団などが

で芸能・異業団としても活動する

## 思い一つに舞台を作る